

今月のみことば 2026年11月

人はうわべを見るが、主(神)は心を見る。(サムエル記第一16章7節)

人の思いと神の思い

ある電車で、座席にいた人がどもりながらすぐ前に立つ人に「〇〇駅はあと何番目ですか」と訊ねました。何度も訊ねる様子は見えて気の毒だったそうです。しかし、訊ねられた男性は何も答えずその人の前から場所を移して行ってしまいました。

それを見ていた乗客の一人が後を追ひ、どもりながら恥ずかしい思いをして人前で何度も訊ねたのに、何も答えずにその場を去るとは何事かと男性に詰問しました。彼がようやく口を開くと、なんと、彼もまたさらにひどいどもりであったというのです。

どもりながら彼は続けました。「この通り私がある人に答えたら、あの人はきっと、自分の真似をされたと思って深く傷つくでしょう。その気持ちは、私もどもりなのでよくわかります。答えないこともあの人を傷つけるでしょうが、答えた方がより深く傷つけると思ったので、悪いけれどもその場を離れたのです。」その言葉を聞いた人は深く自分を恥じたということです。



私自身、この詰問者の思いと重なります。そして、「自分ならもっと」という思いの背後に、経験や知識による判断以上に、さらにどこかもっと深いところの私の意識が、「自分なら」という気持ちに表れるように思えてならないのです。この三人の男性の姿とそれぞれの思いを想像するときに、詰問者の、うわべで人をさばき高き所から人を見下すような、冷たい人間の性質を私自身のうちにみる思いがします。

にもかかわらず、自分と同じ弱さをもって問いかける人の前に、非難されるかもしれないという人の目を気にすることすらみじんもなく、ただ一途に、相手の心を最も守るすべは何か、を追ひ求めて立ち去った男性の思いに驚き、深く恥じ入る私です。

神は、うわべではなく人の心をご覧になるお方です。私たちの日々の暮らしのなかで、どんなに小さな心配や悩みにも神は心をよせてくださる方なのです。今も生きて、私たちをさばくのではなく、どこまでも私たちを愛して、人間よりも低くなって、十字架の上で私たちの罪の身代わりとなってさばかれて死んでくださったお方です。

どうぞ語られる聖書のことばに耳をすませてお聴きください。(S)